

若竹

第38号 2010年7月31日発行

東京都中野区弥生町5-21-1
東京都立富士高等学校

発行 若竹会編集部

兵庫県姫路市北条宮の町172番地

印刷 株式会社 サラト
☎079(284)1380

会長挨拶



会長
谷畑 充
(高9回)

今年は母校の創立90周年に当たります。また今春から附属中学校が出来ました。中学は各学年3学級、高校はその分減って各学年5学級、全校で24学級になります。校地と校舎は今までと変わりません。

創立90周年記念総会は10年に1度の集まり、歳の差はあっても母校に寄せる心には何か共通なものがあるように思われます。またこれを機に同期会が開かれるのも若竹会にとっては喜ばしいことなのです。今回の幹事役は高校17回卒と18回卒、当日の係りは高校30回までの有志です。

恩師の方々には現旧すべての方に別途ご案内を申し上げますが、会員の皆様からもお誘いいただけると幸いです。

都立富士高等学校創立90周年記念 若竹会総会のご案内

90周年記念総会実行委員会

委員長 長谷川 和男 (高17回卒)

府立第五高女として発足し、戦後都立富士高等学校となった私たちの学校は、今年4月から中高一貫校として、新たな歴史を刻むことになりました。今年は創立90周年という記念すべき年に当たります。府立第五高女時代の同窓生を含めて富士高卒業生は、日本社会の各方面でご活躍されています。この秋には10年ぶりとなる同窓会「若竹会」の総会を開催することになりました。下記の要領で開催いたしますので、今から日程を組んでいただいて、多数のご参集を心よりお待ちしております。

都立富士高等学校・創立90周年記念若竹会総会(祝賀会)

日時 2010年10月31日(日)

12:30より受付 13:00開会 15:30閉会

会場 新宿京王プラザホテル・5F コンコードボールルーム

会費 6,000円(申込は本誌「若竹・38号」に同封してある郵貯振替用紙にて9月24日まで受け付けます。)

名誉会長挨拶

名誉会長（学校長）

久永哲雄



日頃より本校の教育活動にご理解とご支援をいただきまして大変感謝申し上げます。私は今年度4月より前任の藤井正俊校長先生よりバトンタッチを受けました、久永哲雄でございます。この伝統ある富士高等学校の創立90周年の節目に第20代校長として、また、富士高等学校附属中学校の初代校長として拝命されたことを誇りに感じると共に、職務の重大さに身の引き締まる思いで着任いたしました。卒業生の方々からはまだまだ若輩者でございますが、どうかよろしく願い申し上げます。

さて、本校は今年度より、中高一貫6年制教育校として新しい教育のスタートを切りました。期待に胸を膨らませた小学生が初めて制服に手を通し、桜の花が満開の中での入学式を迎えました。とても凛々しくわが子の制服姿に涙した保護者もあったようです。対面式では在校生も思わず、「かわいい」と歓声をあげる歓待ぶりで、新しい富士の幕開けを感じさせました。

では、少し中学校をご紹介します。

まずは朝読書や英語の多読が8時10分より始まります。基礎基本の徹底として言語学習を早期に重要視しています。その後8時25分よりホームルームで、瞑想と書写です。生徒は真面目に意欲的に取り組んでおり、心穏やかな状態で一日がスタートできます。また、「尊重・感謝・協力」の3つの心を養う3秒間の礼法により授業が始められます。

3秒間はとても長い時間ですが、丁寧な笑顔のある挨拶はとても好感が持てます。開校式典ではすばらしい挨拶が見受けられると思います。授業では、中高一貫校のメリットを十分に発揮できるように、学習習慣の定着をねらいとしてノートの取り方、予習の仕方、宿題の点検、確認小テスト、朝追試験、全員参加の放課後スタディ（週2回）と個に応じたきめ細かな指導を徹底して行っています。また、早期に読み書き計算の力を身につけることも大事なプログラムとなっています。生徒は一生懸命取り組んでいます、すでに、毎日の自宅での学習時間が2時間以上ある生徒が50%以上もいるのには驚かされます。

先日は中学・高校合同の初めての体育祭を行いました。中学生でも競技可能であり、かつ高校生も楽しむことができる種目を企画しました。もちろん中高では体力面、技術面などの差はありますが、中学生が少しでも高校生と競い合おうとする力強さを感じることができました。また、高校生にとっても様々な成長が見受けられました。今後も中高一貫への良い面をさらに伸ばしていきたいと思えます。

結びに、今年度の入試倍率が東京都の公立中高一貫校で一番低かったのですが、入学者のレベルは他の附属中学校より平均は少し上に位置しており、安堵いたしました。今後はさらに倍率向上のために、ぜひ若竹会の方々より広報いただければ幸いです。

附属中学校がついに開校！



体育祭 タイヤ引き

ついに4月7日、中1生徒120名が入学してきた。3階北側の3教室を根城に、元気な声を響かせている。教員は校長・副校長含めて現在14名。学校玄関上の旧定時制職員室を引き継いで使っている。

さっそく中高で体育祭

富士の3大行事（体育祭・文化祭・合唱祭）は中高一緒にやるものとし、さっそく6月4日に体育祭が行われた。学年対抗の伝統は維持され、中1と高1が白組として組み、高2（青組）・高3（赤組）と競い合った。白組が圧倒的に



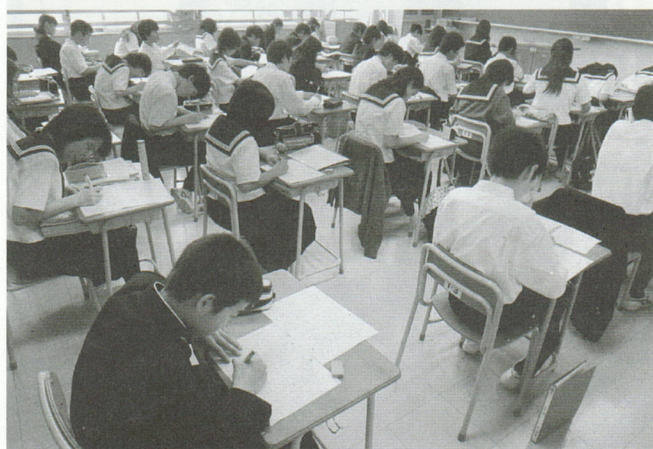
給食

不利なようだが、中高が拮抗できるよう種目設定・工夫がなされた。例えば、タイヤ引き（タイヤの奪い合い）は中学男子と高校女子が対抗したが、中学生の元気さに高校生はたじたじだった。しかし、練習を重ねて臨んだ大ムカデ（半クラス単位でのムカデ競走）や大縄（1クラス単位の縄跳び）は、さすがに高2・3生のほうが上手だった。一方、騎馬戦のような種目は体力差がありすぎるので、中学生は観戦のみだった。

学校生活（典型的な1日）

徒歩または公共の交通機関により（自転車は不可）、生徒は制服で登校。服装は高校とほぼ同じだが、男子はボタンの色が、女子はリボンの色が若干異なる。高校は標準服扱いだが、中学は制服として体育や部活動時を除き常時着用である。因みに、校章は昔の桜のデザインながら、「高」の字が「富士」となり、中高一貫に対応したものになっている。

登校から1時間目の授業の間には、朝読書・瞑想・書写



朝の書写



英語多読授業

の時間が設けられ、朝のSHR（ショート・ホームルーム）へと続く。

50分6時間の授業その他は高校とほぼ同じだが、中学は給食が出る。旧定時制厨房の拡張工事のため、今年度はしばらく大泉高校附属中学で調理されたものが運ばれてくる。今はまだ1学年のみなので給食室で食べている。

午後は週2回「放課後スタディ」が設けられている。いずれかの曜日に給食室に行って、自主的に1時間、勉強することになっている。

部活動はとりあえず週2回でスタート。高校33部あるうち、体制が整うクラブを中学にも設定。今年度は13部が、中高できる範囲で一緒に活動している。

土曜日は平均、月2回学校があり、4時間の授業が行われている。英語はこの日に多読指導を試みているが、ここで、若竹会の支援で購入した本が大いに役立っている。（岩越）



持続可能な社会を目指して！

～野田收さん（高校23回）を訪ねて～

加藤 拓磨（高校50回）

2010年5月5日、調布飛行場から出発した小型飛行機ドルニエは6,000フィートに上昇、調布、川崎、横浜、鎌倉の上空を通過し、しばらく飛行すること40分、太平洋に浮かぶ大自然の島が見えてきた。四方を海に囲まれていることから海流の循環がよく、空から見た海の透明度は高く、サーファーの姿も伺えた。私は谷畑会長からお話をいただき、ガラスアーティストの野田收さんの取材のため、伊豆諸島にある新島に降り立った。新島飛行場から野田さんの奥様とご子息に車で新島ガラスアートセンターへと送っていただいた。ちなみに新島の車両は品川ナンバーである。センターに着くと野田さんとそのお弟子さん3名とご挨拶し、さっそく新島ガラスについてのレクチャーを受ける。

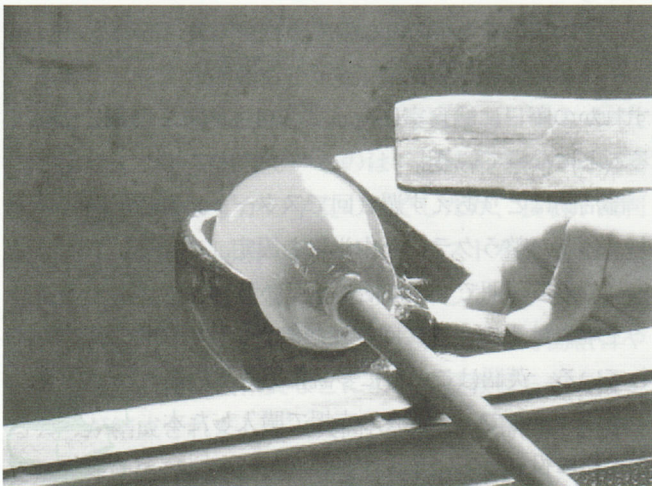
新島で採掘される石はコーガ石（抗火石：黒雲母流紋岩）と呼ばれ、イタリアのリバリ島と新島でしか採れない珍しいものである。このコーガ石、我々に馴染みがあるもので、なんと現在の富士高校の玄関ホール（2階）の壁がまさにそれである。また渋谷のモヤイ像もコーガ石でできており、新島からの寄贈である。ガラス質でスポンジ状の構造を持ったコーガ石は軽量性、耐火性、断熱性、耐酸性、吸音性を備えた上に加工がしやすいため重宝される資源である。このコーガ石を溶かすとガラスとなり、透明感のあるオリーブグリーンの輝きを持ったガラス、皿、アクセサリなどへとその形を変える。島のイベントで配布されるガラス皿の手作りの制作現場を見せていただいた。

コーガ石は窯（溶解炉）の中で1,450℃に熱せられ、石は粘性のある液体となり成分は混合・均一化、赤々と光る水飴状の物体を製品へと変貌させる戦いがここから始まる。野球のボール一個分サイズのドロドロになった高温のガラスは金属の棒の先端に絡まった状態で木のブロックで（下写真）成形され、息が吹き込まれて、ガラスが動かなくなる500℃程度まで下げられる。その後は適度に熱して温度を維持し、加工、そして、また加熱の繰り返しで目標の形としていく。ガラスに魂が吹き込まれていく手作りの良さ、高温の環境で汗だくの中、集中力を切らさずに黙々と一品一品を作り上げていく姿は圧巻、ものづくりの職人の情熱、技を目の当たりにした。

昼食を親水公園前の洒落たレストランで取ることとなった。野田さんの計らいで富士高校出身、現在、東京都立新



コーガ石壁(富士高校2階玄関ホール)



すべて手作業で行われる宙吹きガラス成形の様子

島高等学校の理科・生物教諭をされている八木正徳先生（高校 40 回）と同席し、ご両名と新島のお話を聞く機会をいただいた。

新島にある高校は新島高校のみであり、新島の中学生が全員入学となるのだが最近では大学進学を考えて本土の高校に 2、3 名行くこともある。高校卒業後は東京で社会勉強したい、島に残りたい思いが共存するが、いずれにせよ島には就職先がないため、ほとんどの学生が大学進学、就職のため東京へ行くという。この現状と同様のことを私の同期で現在、島根県隠岐諸島の海士町で町おこしや学校改革に力を注いでいる地域×教育コーディネーターの岩本悠君（高校 50 回）から聞いた。ほとんどの僻地の自治体では高校を存続させる財政力がなく、もし高校廃校となりエリア外の高校へ通うとしたら 3 年間で約 450 万円の学費等が必要となることから、ほとんどの家庭が子の中学卒業とともに僻地から都心部に移り住み、その地には戻ることはない。人口が流出し 3,000 人を切ると町の経済・産業は破綻し、廃村になった例がある。島の人口は現在、ギリギリの 3,000 人ほど、これ以上の人口流出は島の存続に係わる大問題となる。そこで町の活性化、人口の維持のためにキープポイントになるのが若者の教育になるという。ここで教育とは通常授業に加えて、その地域（歴史、文化、風土、産業など）を学ぶことである。若者が地元を誇りを持ち、社会に出ることで後々に地元へ還元するとの考えだ。これは私見であるが社会に出て自分の故郷の自慢による観光誘致、ふるさと納税、本人の帰郷などが見込まれると考えられる。

海士町の隠岐島前高校では島前高校魅力化プロジェクトと題し、公営塾「隠岐国学習センター」、島留学制度の設立など学生の誘致、また地元の名産を紹介する島外への出張授業など多角的な活動を行っている。

新島高校では予備校の DVD 講座授業、土日は先生方のボランティアで補習授業を行い、教育格差を縮めている。野田さんは島の誇りであるコーガ石を用いた体験授業を小学生全学年対象に実施、また 1988 年から毎年、新島国際ガラスアートフェスティバルを開催するなど、島の活性化に向けて精力的に活動をされている。野田さん曰く、「10 年間は不毛だった」とのことだが、皆さんは逆境をバネにして非常にいい表情をされている。富士高校の前身である東京府立第五高等女学校の時代から続いているという『自由』の校風が野田さん、八木先生、岩本君のような熱いハート、思いやりのある人材を育ててきたのではないかと思います。

経済成長時代と異なり、人並みの生活水準を全員が享受している現代、共通の目標はなく価値観が多様化し、個の時代といわれている。閉鎖的な現代に風穴を開けるには画



親水公園にて野田・八木両家と記念写真

期的なアイデアを創出する個性と、それを生かす協調性が必要となる。東京もんは『不自由ない』生活をしている。しかし『不自由ない=自由』ではない。高校で学んだ『自由』を改めて見直し、自分を俯瞰の視点で捉え、個性を磨き育て、充実感のある実りある生き方をしたいと考えさせられる新島訪問であった。

潮風薫る新島の大地より

プロフィール

新島 HP <http://www.niijima.com/index.html>

海士町 HP <http://www.town.ama.shimane.jp/>

野田 収（高校 23 回）：新島出身。多摩美術大学、米国イリノイ州立大大学院にてガラス工芸を学び、新島村の要請を受け、ガラスアートセンター・ディレクターとなる。国内外でガラスアーティストとして活躍される傍ら、大学の非常勤講師、新島の町おこしに関する活動など多方面で活躍中。

加藤 拓磨（高校 50 回）：中野出身。若竹会理事。国土交通省国土技術政策技術研究所研究官。ゲリラ豪雨・気候変動適応対策を施策。



裁判中の同期生を支援する「長教授らを支援する会」

■ 同期会、メーリングリスト、支援する会

私たち 24 回生（1972 年卒）は、92 年に開催した『卒業 20 年記念同期会』を機に 5 年ごとに同期会を開催しています。毎回 150 名ほどの参加を得て盛り上がり、クラスのつながりを超えて現役時代は顔さえも知らなかった仲間同士の輪が広がっています。

また、インターネットにおいても 10 年ほど前から「富士高 24 回」というメーリングリストを立ち上げ（約 150 名参加）、意見・情報交換などの交流を楽しんでいます。そんな中、同期の仲間に突然大きな事件が降りかかってきました。筑波大学でプラズマ研究センター長を務めていた長照二君が、「研究論文のデータ改ざん」という理由で懲戒解雇（08 年）されたのです。現在長君は「解雇無効、損害賠償請求」の裁判を進行中です。また、富士高 24 回生の有志を中心メンバーとした「長教授らを支援する会」を立ち上げ、長教授らを支援する様々な活動を行っています。（植田）

■ 事件の概要と「支援する会」について

筑波大学は 08 年 3 月、当時大学内の共同利用センターの一つであるプラズマ研究センター長であった長照二教授を解任、8 月には懲戒解雇の処分を行いました。また 10 月には、長教授のもとで共同研究を行っていた講師 3 人に対して、停職 1 カ月から 4 カ月という処分を発表しました。処分理由は長教授が物理学の世界で最も権威あると言われる米国物理学会の学会専門誌“Physical Review Letters”に発表した論文のデータに「改ざん」があった、とする「研究不正行為」でした。

処分当時、いくつかのマスコミ報道はあったものの、この事件について知っているのは、相談を受けた同期友人の弁護士ほかわずかの学友のみでしたが、長君が裁判を起こすに至り、同期のメーリングリストを通じて自然発生的に長君を支援する会が作られました。その後、09 年 2 月にはこの会を母体として、茨城県内の労働組合や関東近隣の高等学校教員などにより「長教授らを支援する会」が結成されました（共同代表に富士高同窓会長の谷畑充先生にご就任いただきました）。

学友のそれぞれの得意な分野を活用して多彩な支援活動が進められています。結成以来 2 度にわたる集会開催他、筑波大学及びつくば駅周辺でのビラ配布・宣伝行動、大学に対する処分撤回要請の署名（約 5,000 筆集約）、機関紙の発行、ホームページの作成、マスコミ対策、主要文書の英訳、支援グッズの製作販売などです。

それらの成果もあり、テレビ局 TBS が『報道特集 NEXT』『報道特集』で 2 度にわたって特集を放映するなど、社会的な関心を大いに集めるに至りました。

第 1 審の水戸地裁土浦支部での口頭弁論では、「処分理由が科学的に根拠がないこと」を中心に主張を展開したものの、内容があまりにも専門的であるからなのかどうか裁判所の理解を得るにいたらず、「請求棄却」という結果となり、現在、東京高裁にて控訴中です。

私たちは、この事件の背景に、プラズマ核融合学会内部の研究をめぐる長年の対立と、これを利用した筑波大学内部での予算獲得をめぐる争いがあり、それゆえ長教授らの画期的な研究成果をなき物としようとする意図が強く働いているものと考えています。まさにこの事件は「現代のガリレオ裁判」とも言えるのではないのでしょうか。

私たち同期の学友は、長君が一日も早く元の研究生活に戻れることを願い最後まで支援を続けていきます。

なお詳しくは支援する会のホームページ <http://www.cho-teruji.org/> をご覧下さい。（園部）

■ 長教授弁護団からの一言

私たちは、同期生長照二君に対して不正に仕組まれた「研究論文のデータ改ざん」という汚名を晴らすため、法治国家における唯一とも云うべき手段である処分取消判決を求めて裁判所での主張立証活動を行っています。しかし、それを勝ち取る為には、裁判官という国家官僚が持つ「国立筑波大学という権力組織が行った処分はその前提において正しい」という既成概念に“挑戦”して崩していかなばなりません。個人がこれを遂行するためには途方もないエネルギーと地道な努力が必要です。

「正義は必ず勝つ」と信じて頂き、皆様一人ひとりのご支援とご声援をお願いします。

映画『ハリケーン』のようなことは誰の身にも起こりえます。もし、自分の身に同じようなことが降りかかったら・・・とお考えください。（柏木）

■ 長照二教授より—私たちの主張と支援のお礼—

問題となった私たちの論文のポイントは、ミラー型（直線型）のプラズマ実験装置において、電磁波をかけると「プラズマ乱流の抑制」効果がみられる、ということです。乱流の抑制ができれば、プラズマを活用する核融合に大きな道が拓かれるので、意義深いものと自負していますし、国際的にもそのような評価をいただいています。しかし、大学はこの論文のデータに「改ざん」ありとして「論文の取り下げ」を勧告、それを拒否するや「懲戒解雇」という信じがたい行動を取りました。

本件の発端は、学生に対するデータ「改ざん」強制の告発です。大学がデータ「改ざん」としてあげた証拠は、実は全く事実無根なものなのです。また、大学は、特定の学生が中退時に、何らかの理由により本論文のデータの解析結果を消去し、かつ、解析結果のバックアップも同時に「消失」されていた、という事実を知りながら、大学の調査委員会は、「解析結果の完全再現」を私たちに求めてきました。幸い生データは残っていたので、解析可能な多数の時刻帯を探し回り、“世界的に認められている科学的方法”に則ったデータ点の再現方法により解析結果を提示しました。しかし、大学側は、調査委員会の外部委員にはこの経過を知らさずに、「完全再現ができてないゆえ改ざん」だと決め付けました。科学とは全く別次元の力が働いていると言わざるを得ません。

私たちは主張を英訳し、米国物理学協会の“Physics of Plasmas”にも投稿しました。本事件を知った同誌のEditorにより、5名の専門家による厳格な再査読が行われ、「大変優れた論文である」と言う評価を頂戴しました。しかし大学はその評価を無視し、当初の判断を変えようとしませんでした。これに対し世界的に大変高名な10

◆長照二（ちょう・てるじ）プロフィール◆

筑波大学プラズマ研究センター長／大学院数理物質科学研究科物理学専攻・教授。
専門：プラズマ物理学・核融合科学。
履歴：1976年京大理学部卒。1981年京大大学院理学研究科（物理学）修了。理学博士。1984年筑波大学物理学系講師。1996年より教授。2001年物理学研究科長、同数理物質科学研究科物理学専攻長。2001年プラズマ・核融合学会 理事。2003年筑波大学プラズマ研究センター長。核融合科学研究所 運営協議会委員、日本原子力研究所 核融合研究委員会 委員。
受賞歴：プラズマ・核融合学会 学会賞（第1回技術進歩賞）学術論文：米国物理学会誌 Physical Review Letters 9編を含む約250編。／著書：「プラズマの波動（上）（下）」（吉岡書店）[スティックス著[米国物理学会出版] 翻訳] など

名以上の科学者の方が、本件は科学に対しての重大な問題と位置づけました。米国物理学会の機関紙“Physics Today”には、連名で、筑波大学に対する抗議文書を2度も掲載し、筑波大学のやり方を「検閲」と断定しました。「大学の所行をこそ公正で国際的な委員会調査を求めろ」という事態に至っております。

私たちは、この事件で、日本の学術や見識が世界に問われている現状を思うと、ただただ、心が痛む思いです。この度は、皆様には大変な御心配をお掛けし、また誠に有り難いお力添えを賜りました。特に、母校富士高の若竹会会長でいらっしゃる谷畑先生をはじめ、多くの富士高卒業生の皆様の心暖まる御支援の数々や、また国内では、京大、阪大、高エネルギー加速器研究機構等々の専門の科学者の皆様、更には報道機関の皆様のお力添えに心より深謝申し上げます。（長）

* 支援者のエールの声 *

- 筑波大学は客観的な事実もなく告知聴聞の機会を与えずに懲戒解雇しました。大学の自主独立性を履き違えた行為ではありませんか。3人の学外の調査委員にデータ消失の事実を明示していない「研究公正委員会調査委員会（大学が設置）」の意見は適正といえますか。長照二氏の控訴を全面的に支持します。（匿名）
- 長教授解雇事件に関する筑波大学の一連の動きや説明内容は不可解かつ不誠実であり異様だ。筑波大学は、世界の科学者ばかりでなく、教育界に正々堂々と事実を開示すべきである。そうでなければ、日本の大学そのものが世界の学界から信用されなくなるであろう。（在アメリカ、校條）
- 潔くも、それ故に最も困難な戦いを長さんは選択しました。事件の背景を知るほどに、大学の不自然な言動が浮き彫りにされていきます。客観的視点に立った支援を今後も続けます。日本とそして世界の将来のためにも。（千葉）
- 世界最先端のプラズマ研究の未来のためにも日本の科学の未来のためにも、さらには学問の公正と自由のためにも、長さんの名誉回復と原職復帰を一日も早く願っています。多くの方に、是非真実を知って欲しいと思います。（ホノルルより、下吉）
- 水戸地裁に何度も傍聴参加しましたが、驚くことに裁判官の判断は大学側とまったく同意見の判決であり、「正しい科学的理解もされず、判決理由も納得いかず、公正ではない」と痛感しました。東京高裁での公正な判断と判決に期待します。（長船）

ホームページの開設

前号で予告した通り、昨年10月より、同窓会関係の情報の授受の一助となるよう、若竹会のホームページ（HP）を開設しています。まだコンテンツ（内容）も記事の追加・更新の頻度も十分ではありませんが、皆様の再訪を期して、徐々に充実させていくつもりです。長い目で見守ってください。

HPアドレスと開設の目的（再掲載）

1. アドレス

<http://www.fuji-daigo-wakatakekai.org/>

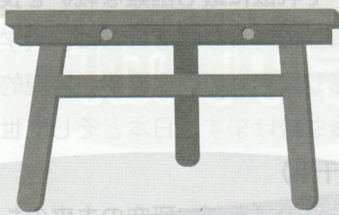
2. 目的

- ①役員会・事務局と各会員及び会員相互の情報の共有
- ②歴史的記録の電子化、後世への引き継ぎ
- ③回顧に留まらない、現在と未来を見据えた交流

母校の2010年の文化祭の日程

9/11 (土)・9/12 (日)

後輩に声をかけよう



編集後記

役員会の中に何となく残って19年。この間、創立70周年・新校舎落成、創立80周年・新体育館竣工があり、そして今度は創立90周年・附属中学開校記念のイベントだ。ふだんは役員会中心にこじんまりした活動を続けている若竹会、この様な節目になると有志の回卒・会員が集まり、様々な企画が進んでいく。すごいな、と思って見えています。 (岩越)

90周年記念総会を会員に等しくお知らせするのもこの38号の使命。

とてつもない大きなエネルギーを発揮する同期会の活動も、離れた先輩と後輩の出会いも若竹会の一面。離任着任なさる先生方の数の多さは今の教育行政の一面なのか。 (谷畑)

先生方のご異動 (敬称略)

離任 (22年3月)

藤井正俊	校長	ご退職
池田篤	国語	日比谷高校へ
田村吉子	数学	農芸高校へ
角田雅教	数学	日比谷高校へ
小林寛和	化学	日比谷高校へ
幾島和子	生物	農芸高校へ
岡田暁美	音楽	松が谷高校へ
塩崎京子	英語	小平高校へ
管田真代	英語	神代高校へ
北見英二	英語	ご退職
宮治和夫	英語	日比谷高校へ
勝俣史子	国語	ご退職
徳久寛	公民	北多摩高校へ

着任 (22年4月)

久永哲雄	校長	大山高校から
加藤順子	国語	第四商業高校から
阿萬良一	数学	白鷗高校から
飯島孝之	数学	杉並高校から
大和田浩次	英語	晴海総合高校から
常見聡	英語	小平西高校から
岩松孝子	英語	新採用
佐竹靖庸	化学	国際高校から
造作聡美	国語	研修センターから
藤原善郎	数学	府中東高校から
後藤洋士	生物	青梅総合高校から
照井順子	体育	中野特別支援校から
岩越司	英語	戸山高校から
田中未緒	養護	府中朝日特別支援校から

◎着任の岩越司先生は高校29回卒です。

前37号の記載に誤りがありました。訂正し失礼をお詫び申し上げます

離任 河田修二先生(理科)武蔵高校へ(小平高校は誤り)

離任 高橋文子先生(英語)小平高校へ(未記載)